②　「長崎高等商業学校三十年史」―長崎高等商業学校編を読む

本書は昭和10(一九三五)年10月発刊された白眉の学校史である。A5判四九七頁「題簽は只見校長の筆に成る」「全巻を分って第一編に明治時代、第二編に大正時代、第三編に昭和時代とし」「各編は、概観・規定・施設・職員・生徒及び卒業者・雑記の六章よりなり、第四編現況のみ、概観・雑記の両者に代ふるに概説・学年暦を以てした」巻末には旧職員録と付録(学友会・研究会・協同組合・同窓会・学校年表)を掲げる。写真や図録も各時代別に一四頁二三葉の写真と本校平面図(昭和十年九月四日長崎要塞司令部検閲済)を加える。将に本校の興隆期を思わせる気迫に満ちた緻密な構成である。第七代・只見校長の序言は謂う。「記念事業の一として開校三十年史の刊行を企画し、今春来其編纂に着手、九月之を了するに至った。古き記録類を渉猟するとゝもに、諸方面の関係者に就き巨細の資料を蒐集し、刪綴修整、日夜其稿を継いだ編纂委員の非常な努力は、私の深謝に堪えぬところである」と。

明治時代の「概観」には本校創立の経緯と発展。即ち、母校は日露戦争が終結した明治38(一九〇三)年、長崎高商は東京・神戸に続く3番目の官立高等商業学校として、長崎県西彼杵群上長崎村片淵郷に開校した。「規定」には「重要関係法令」と「校則」(目的・定員・学科・入退学・修業試験・生徒心得など)、「施設」では土地・建物・図書館・陳列館・自彊寮などの規模・内容を列記。「職員」「生徒及び卒業者」数を掲げ「雑記」には開校式・第一回卒業式・校歌・校旗設定・ラッド博士講演会・学術講演者などを列記する。

大正時代の「概観」では、歴代校長の紹介・中学校、商業学校出身者の二部制度授業・学科目の大改正・研究館の新設を挙げ、「規定」では学科課程に「英・支・露・独・仏」の五ヶ国語を第二外語として採用、「海外貿易科」の設置を記述。「職員」数は開校時の一二名より四一名へ、「卒業者」総数は十五年三月末で本科二三〇六名であること。更に「雑記」では創立十、二十周年記念式典・研究館落成式・成人教育講座などに触れる。

昭和時代「概観」は謂う。「現時であるから、批判的観察を述べるのは差し控えたい。唯概言すれば、それは発展期に継ぐ膨張期であって」神戸高商が商業大学に昇格し、己は置き去りにされた無念さを語る。その余波で本校現在の在学者数は、本科・海外貿易科・貿易別科などを合して約八百五十名であり、学友会・同窓会活動も本期に入って顕著である。

然し第四編「現況」では「九州のみでも官立二私立二の四高商を数ふる現在、中央に遠い本校の位置は頗る不利と謂わねばならぬ。唯此地理的不利の克服は人心の協和によってのみ可能であり、大方の援助指導を切望して止まない。惟ふに、明治・大正・昭和の三時代を通ずる我長崎高商の隆運は、開校以来、関係者の一致協力した結果であり、本校が将来一層秩序的な進展を遂ぐることは、我々学校関係者の衷心希望して已まぬところである」と。

☆本書の周辺☆数年前、県立図書館で本書に巡り合う。瓊林会館は所有せず、昨年の夏に東南ア研・書庫にあった1冊を瓊林会が譲受け新たに装幀した。昭和戦前期、学校側が著した母校史を代表する歴史的な著作である。